

りたくてならなかった。涙が出て止めようがなかった。

ロスケよ、武人の情けあらば我が頭上にて我が愛機の飛行をやめよ。

大正八年六月八日 愛媛県松山市生

第五十一飛行師団第二十五練成飛行隊

シベリア 自昭和二十年九月 至昭和二十三

年十月 ナホトカ、カワレルワ、キンスハ、ウス

リースク市(セミヨノフカ)

## 抑留記

福岡県 羽野 一

昭和十九(一九四四)年三月十日、陸軍記念日、

この日牡丹江省東寧の野砲第二一二部隊におきまして桂林作戦出動のための一個大隊独立致しまして、三一五〇部隊と命名され出陣式を行い桂林攻略に出動致しました。十一月に桂林は陥落、二十年の正月は桂林で迎えました。その後すぐに反転命令があり反転致しまして、七月には満州に戻り終戦の時はハルピン飛行場の警備に就いておりました。八月十五日も警備に当っておったのでありますが、十一時過ぎ全員集合の連絡があり宿舎に行きました。そこで天皇陛下のお言葉、耐え難きを耐え忍び難きを忍ぶという悲痛な玉音をお聴きし、戦は敗戦に終り無条件降伏という最も残念な結果となつてしまつた事を知りました。さあどうなることかと思つておりますと、一時間ほど致し

まして関東軍は依然として戦鬪を続行するという軍司令部からの達使が参りました。そうなるとう飛行場の警備ではなくどこかへ出動命令が来るとうことです。

完全武装して待機という事になりました。ソ連軍はすでに国境を突破して大戦車部隊が入つて来ているという情報があり、準備が終つたのが夕方。各小隊ごとに大砲一門に三五センチ角ぐらいの黄色爆薬一個、大隊長以下各人一粒の毒薬(たぶん青酸カリ)だったと思います、衛生兵が配布、こうして夜を迎えました。もし戦に敗れた場合は全員一カ所に集合して爆薬で大砲と共に爆破、それでも死ねなかつた者は毒を呑んで死ねという事です。砲兵の本領は火砲と軍命を共にせよということとです。そうした覚悟をしながら飛行場の草原に寝待機したのでありますが、そうした心境の時は誰一人として話し声を出す者もおりません。そうかと言つて眠つておる者もおりません。今夜限りの命かと思えばどんな大胆な者でも眠れないよ

うです。特に妻子のある人は可哀相でありました。私は独身で特に気に掛かる事ありませんでしたが、やはり親兄弟家族の者全部の色々な事が浮んで来て眠れるものではありません。家を離れて何年後でも家を出る前の事が色々と脳裏に浮んでくるものでございます。この一夜は私の尊い人生体験であつたと思います。

満州の夏の夜明けは早く三時半頃には明るくなってきます。ついに出動の命令はこなかつた。なぜかと申しますと、関東軍が戦鬪を続ければ連合軍は内地をたたくと言つたそうです。そのため中止となつたそうです。一難は去りましたが果して我々はどうなるかという心配が残つたわけですから、それと同時に、もし捕虜となつた場合大きな虐待を受けるのではないかという話も出ていたようでありました。(八月十六日)近くには日本人街があり、子供連れの三十代ぐらいの大勢の奥さん達がおられました。ご主人は現地召集で不在です。どうしたら良いか途方に暮れておられました。

私達は戦地での経験がありましたから、ハルピンの糧秣庫及び被服庫には莫大な物資が保管されておりましたから、そのままにしておればソ連軍が持帰るか、または満人が取るかのいずれかです。私達は係に言つて、それを受領して来て民間人に配付致しました。移動の場合、米は重いし生では食べられない、乾パンが良い。被服は着物はだめ。満州は十月には寒くなります。女性でも軍服を着用して毛布、手袋、靴下等を多量に持つておきなさいと言つて渡しました。この日はそれで終わりましたが、夕方日没日暮れに二中隊の兵三人大砲に前後より弾を込めて二人は砲身に跨り、一人は前でリュウジョウを引き大砲を爆破したのであります。ものすごい大音響がしました。二人は即死、一人は重傷となり入院、その後の消息は分かりません。その後大隊長の訓示があり、今死んでも大死だから今後このような事があつてはならないという訓示がありました。(八月十七日)大砲は武装解除前にハルピン(松花江)スンガリ川に沈めま

とでどうすることも出来なかつた事を同胞として本当に申し訳ないと今なお思つております。数日後国境の綏芬河を通過、ソ連領に入る、国境を通過する時にソ連のトーチカを見ようと探しましたが、ただ通過する時点土盛があつてカヤが繁つて見えるところがあり、あれがトーチカだろうと思ひました。満州国を通過する間は農作物(マクワウリ、西瓜、トウキビ)を取ることを許しましたが、ロシア領に入つてからはそれが出来ず非常に困りました。ソ連も戦争に勝つためには食糧物資すべてが無く、国民は耐乏生活をさせられていたようです。ロシアの市民が私達に物乞いに来るほどでした。私達の目的地はウラジオストツクより三十数里奥にある炭坑町アルチョンでした。(九月十三日頃アルチョン着)牡丹江出發よりこれまでの間に駐留しているソ連軍の装備を見てきたのであります。私達素人の見た目でも日本に比べ雲泥の差があつたようにございます。日本戦車は非常に小さくオモチヤのように見えません。大砲に

した。馬は放馬し満人が持帰りました。ハルピンの飛行場の飛行機は数多い飛行機がいつの間にかどこかへ行つて一機もいなくなりました。

八月十九日、ソ連軍より何回も何回も武器弾薬を一カ所に集積するように達しがあり、一カ所に集積し武装解除の終つた時点で飛行機でソ連軍が来て、ソ連軍の指揮下に入りました。

武装解除され武器を持たないと満人または朝鮮人に危険を感じるようになります。武器を持つたソ連軍の保護が必要になります。

八月二十五日、ソ連に向つて徒歩にて出發。このところ二週間ほどソ連兵と行動を共にしておりますが、ロシア人は絶対に我々には手を出さない事が分かりました。牡丹江に来るとソ連の機械化部隊が駐屯していましたが横道河子の辺りでは、日本の戦車が数台めちやめちやにされて大勢戦死しておられるのを見ました。皆裸体で多分被服は満人に剥ぎ取られたものと思われます。開拓団も自決されておられました。私達はソ連兵指揮のも

しても馬を使つての砲兵なんてありません。全部機械化部隊です。カチュシヤといつてソ連自慢のロケット砲もありました。当時のロシア極東の地は流刑の地で囚人収容の大きな兵舎みたいな家が空いていました。これより私達の苦労が始まったのであります。食糧はロシアパン一〇〇グラム、スープはニンジン汁小さい空缶一杯、米麦なし。こんな食事のため、一カ月ぐらいの間に皆歩くのも苦労するようになりました。仕事どころではありません。生きていくのが精一杯でした。この時多くの人が死んでいきました。ソ連収容所に入つて六カ月以内に死ななければ後は死んでおりません。六カ月後頃から満州の日本軍の物資が運ばれて来たからです。食糧並びに被服、医薬品すべてが入つて来ましたから待遇が良くなりました。それは鉄道による輸送であつたと思ひます。綏芬河よりはソ連の鉄道はすぐに入れます。レールの中が内地のより満州の鉄道は十五センチ広く、また満州

のよりソ連の鉄道は十二センチ間が広いのです。私達が満州領を通る時に日本の鉄道兵を使って、ソ連の列車が物資のある所まで入れるように工事をやっているのを見受けました。多分牡丹江までと思います。

工事が終つてからは、満州の物資が大量に送られて来た事は確実であります。私達は駅に使役に行つた事があります。

おびただしい食糧、衣類の外に、工作機械等が送つてきていました。列車から降ろした旋盤等を戦車で引いておりますのを見ました。日本の専門家に言わせると、あんなに引いたら機械に非常に悪いと言つておりました。

ここでロシア人の風俗習慣について少し申し上げます。戦後すぐでしたから物資の無かつたせいか立派な物は着ていませんでした。若い女性等は半長靴を履いて、二人以上で歩く時は必ず歩調を合わせておりました。それで歩く姿は奇麗なものでした。歩いている人がトラックが通りかかる

と手を上げれば止めて乗せて行き、降りる時には自分の必要に応じて運転席の天井を叩けば止めて降ろしておりました。どのトラックにも大勢乗つておりました。またロシアの軍医は女医が多く、

そのためか日本軍医より格段に質が落ちていたように思われます。また体温が三八度以上あれば休んでよかつたため、部屋に留守番を残すため、故意に体温を上げて診察を受け交替で休んでおりました。ロシア人はツバを吐く時には口を開けずに歯の間からシューツと出します。また洗面する時には大きな金のコップに、水を注いで口に含み口から出して顔を洗つております。洗面器は使いません。昔、沖貞介氏が密偵に行つてロシア人に逮捕され処刑されたのも洗面器を使つていたのを見付けられて逮捕されたそうです。それから、煙草は専売ではありませんでした。自分で作つた煙草を、自分で刻んで新聞紙に巻いてのんでいました。

ロシア人の教育程度は低かつたと思います。一例を申し上げますと掛け算がだめです。日本人を

並べるのに五列縦隊です。一並びが五人ですから二列ずつ数えれば十人で計算が早いからです。

私達が驚きました事は、ロシア人に初めて会つた時に、日本人の武士はなぜ腹を切るかと尋ねられた時でありました。このことはよほど以前からロシア人に浸透していたものと思われまふ。資本主義の話をするに彼等は熱心に聞いておりました。自由主義に變つて喜んでゐる事でしょう。ロシアへ入つて、いつ帰るか全く解らないから、ロシア語を早く覚えなないと仕事上でも損をするでしょうと通訳は言つておりました。ロシア人と仕事はするし分からないながらも会話はあるし、年も二十四歳ぐらいで若かつたし、数字と単語はどうやら覚えたとやうでした。ロシア語は英語と少し似ている点もありました。英語のエースはロシア語でもエースです。女性のマダムも同じです。日本の事をロシア語でジャポン、日本人の事をジャポンスキーと言います。ロシア人の事をロスキーと言います。ロスキーを略してロスケと言つても皆怒り

ません。我々から思いますといかにも軽蔑したように聞えますが、それでいいのです。

ロシア人はニイチョウという言葉を非常に多く使います。ニイチョウとは何でもないということ。私達と一緒に仕事をしておりましたノウビス、ジメトロクという二人のロシア人がどうしても自分で求めた仕事ではないように見えましたから、貴方達はなんでここで働いているのですかと尋ねますと、始めのうちはニイチョウと言つておりましたが、日が過ぎるに従つて話の幅が広くなり、彼等が言いますには我々はゲルマンと戦つて捕虜になつた、それで帰国してここで働いていると言つておりました。

極東シベリアの地は囚人が多いようです。私達は二回目のシベリアの冬を迎え、冬は探鉱、夏は地上の仕事をしながら過してまいりました。シベリアの冬は非常に寒い。寒い時には零下四〇度ぐらいまで下がります。そんな時、地上では何もできません。炭坑内では年中気温は変わりません。零

下三〇度以下の寒さといいますが日本では想像もできません。日本の冬の服装では十分間以上外には立ってられないと思います。第二次大戦中ドイツのヒットラーもモスクワ郊外まで攻めながら夏の服装で行って、その年冬が早く来たためにゲルマンは負けたといっておりました。零下三〇度を下れば車の始動に時間がかかります。

ロシア人は寒さにも強いが防寒具が完璧です。なお、作業場で見かけた事ですが、作業場の近くに将校住宅がありました。少尉、中尉、大尉の尉官が多かったのですが、帰って来ると拳銃を離し玄関に置き、大きなバケツ二個六尺棒で担い水くみを致します。何回も何回もです。翌日の使用量をくみ溜めしているのでしょう。一日だけでなく帰ってきたら毎日の日課のようでありました。

日本人では出来ない事と思います。ロシア人は偉ぶりません。普通は名は呼び捨てですが、偉い人には例えばスターリンなんかにはタワレシスターリンと呼んでいたようです。ロシアへ来て二回

目の冬が終りそろそろ春の萌しが見え始めてきました。

昭和二十二年四月三日突然夜十二時頃、帰還命令(ダモイ)の発表と言って起こされました。収容所には千六百人ぐらいおりました。その中から百五十人です。私もその中に入っておりました。嬉しかったですね。今帰れば桜の花に間に合うと言っていました。時に二十七歳。もう寝るところではありません。帰還準備です。帰還準備といってもなんにもないから簡単なものです。朝食をすまし八時頃には出て行きました。列車輸送です。行く先はナホトカ港です。

三時間ほどでナホトカに着きました。途中は大平原ではなく小さな山の多い所です。港には日本の国旗を立てた興安丸が来ていました。皆なつかしきで喜びました。ところが我々を船には連れて行かずにもた収容所に連れて行きます。おかしな事だなあと思ひまして、ソ連政治局員の手下で私によく話してくれる人でTという三十歳ぐらいの

人でしたが、貴方達は軍国主義で民主化してないと言うのです。民主化するまでここに置いて教育

すると言うのです。大変な事になりました。今までの収容所では何も特別な教育もなく、うっかりしていたわけです。ここへ来てから赤旗の歌、メーデーの歌をよく歌わせました。入所後すぐ百五十人の中より十人が選ばれ、私もその中に入り、

作業に行かず本部へ行ってボルシエブイキー(共産党歴史)マルクス・レーニン主義が書いてある本、各人一冊頂きそれによって教育があり、作業から帰って来た隊員に五時頃より一時間三十分ぐらい、毎日話しておりました。そうした生活が続いているうちにナホトカへ来て八月となり十一月になり、十一月二十七日の夜十一時頃帰還者名の発表がありました。翌日お昼頃には乗船が終り内地帰還の途に付きました。ボルシエブイキーの本は十人ソ連よりもらって来ていましたが、船長が言われるにはソ連からのもらい物を持っていると米兵に引掛かるのですよと言われますから、船

の上より日本海に捨てました。舞鶴上陸は十一月三十日でございました。

今ソ連邦は崩壊して元のロシアに戻ったのでありますがいかがなものでしょうか。ロシアという国は寒さが長い国で土地柄が非常に悪く、農業、産業共に発展するところではないようでございます。

私は中国及びシベリアで六年有余の歳月を過してきましたが、私の生涯を通じて外地での生活は貴重な人生体験であったと思っております。